

御祭日

三月七日  
十月七日

天御中主大御神

高皇產靈大御神

神皇產靈大御神

伊弉那大御神

伊弉美大御神

天照大御神

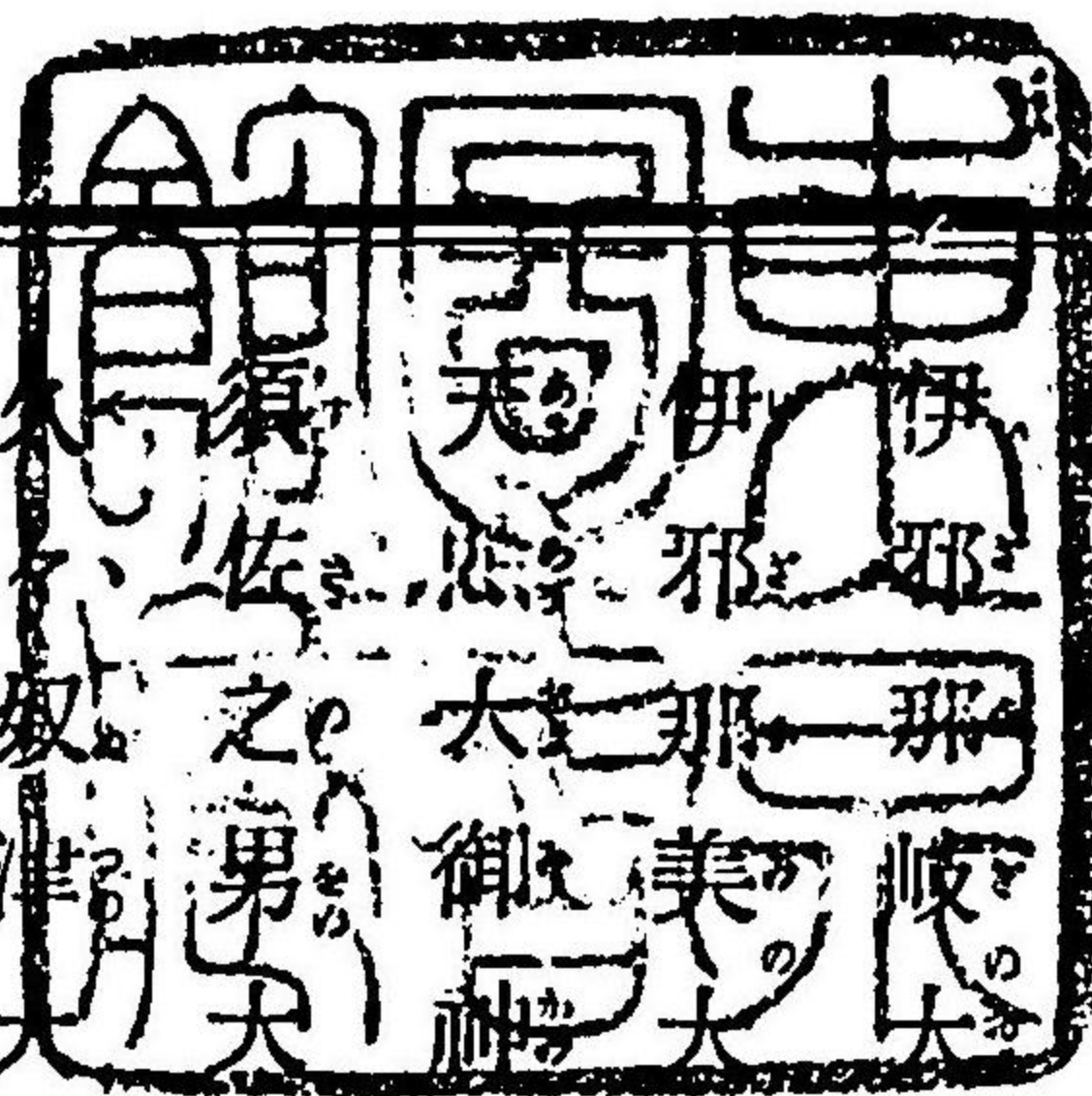
須佐之男大御神

木津大御神

少彥大神

猿田彥大神

天宇受賣大神



今上天皇

今上皇后

御蔭日

大綿津美大御神

一日

大穴率遲大御神

二日

少彥大神

三日

國常立大御神

六日

須佐之男大御神

七日

猿田彥大神

十日

伊邪那岐大御神

十五日

國常立大御神

十六日

伊邪那美大御神

十七日

天照大御神

廿三日

國常立大御神

廿六日

月讀大御神

廿七日

御神德

天之大御神

海之大御神

天照日大御神

地之大御神

海之大御神

天照日大御神

月讀大御神

伊邪那美大御神

伊邪那岐大御神

須佐之男大御神

頭

耳

目

口

咽

脚

腹

右手

左手

足

神教七ヶ條

- 一天津神國津神を尊敬する事
- 一忠君愛國の念を振起する事
- 一親よ事へて孝を盡す事
- 一憤怒の念を除き博く人を愛する事
- 一他人の非を誘るべからざる事
- 一己の分限よ安じて足ることを知る事
- 一誠實は寶を産む母と知る事

神教七ヶ條之神解

神様よ信心無きものは命を保つ事あり  
 忠愛無きものは人よあらず  
 孝心無きものは其身よ徳なり  
 憤怒腹立の心より敵を求むる

人の惡しき事を語るものゝ其罪吾身に罹る  
 足る事を知らぬえ幸ひを受る事あり  
 人に妨げするものゝ必ず其身妨げを受る  
 神様に信心するものゝ命を保つ  
 君に忠義の心あらを身の出精を致す  
 親に孝を盡せば家の寶其身に徳を積む  
 人に誠を盡せば子孫に善種子を蒔く  
 人の善き事を語るものゝ身に徳を積む  
 憤怒腹立なきものゝ世界に敵なり  
 不足を思はずを自然の幸ひを受る

毎朝夕禮拜の辭

君の御榮に民安らかに御守り給へ幸へ給ふ

神様に仕て御道を開くものゝ、行ひの御法

百日の間毎朝の水行

月の七日を火の物絶ち

但し一日出来難き人は朝一度丈までも宜し

十五日の日を鹽物絶ち

但し前全断

廿三日の日を土足参り

但し遠方まで参り難き人は我家の屋敷を一廻りして天拜をしても宜し

此行ひを七ヶ月の間務むれを身の垢れ去りて手の平に七日

の月の形を賜り御禁厭の御傳授ありて人の病れ直す徳ある

なり是を身の御修行と云ふ御神筆の小札を御授に於る

水行を伊邪那岐大御神伊邪那美大御神の御身潔ありて尊き

神の御顯れ成されくハ水の徳なり

火の物絶ちを煮焼の態なき間に洗米を以て命れつなき成

されたるなり

鹽物絶ちハ鹽の出来さる間を鹽を食し給えさり一なり

土足参りて天照大御神は地は御徳を知しめしめて土足にて御

田を御作り給ひて徳を積み成れしあり

行ひて神様等の成れし事を修行ひて身に徳を求むる譯なり

天の御修行も行ひてかえり事なし

地の御修行も同一

月の御修行も同一

以上四七廿八ヶ月の御修行を積み天地の神と同様と成り

て大全世界の御柱となり天地あらん限り生神と成る事なれ

え志し有らん人此御修行を成すべきものなり

一天の御修行を終りたれを人の病の蟲封しの御法御傳授あ

るなり

一地の御修行を終りたれを肺病の蟲封し家の蟲封し野山の

四足えふ蟲たつ蟲のこらす蟲封しの御法御傳授あるなり

しかりて御神筆と御肖像を御授與しあり是を以て大全を

開く

神様より日よ三度の御禮をする事

三度の外よ食事をすする事なり

酒よ煙草を戒むる事

晝形を亂す事勿れ

興行場へ行事勿れ

火鉢炬燵を禁ずる事

親のゆるさぬ縁を結ふ事出來す

男女共よ不義の事を心て思ふても大きな罪

人の所有の物を欲しき心あるべからず

漫心の心あらを神様が御見放よなる

抑月の御徳を書記す

月は世界を御造りなさる元あり故に人をも御造りなさる  
くが御役あり人の元は月より流れ星を母の體內よ御授け給  
はり其魂の勢ひある故よ僅一滴の露が七日の間に一寸の生  
物とあり七日を二つすれを一寸八分とあり夫を元として僅  
か一滴の露が五倫五躰を調て生れるものなり其形の調ふは  
七日く節々とのひて七日を三十すれを三七二百十日  
となりて其間に調ふものあり手足の節々もかたまり音も出  
るよふになり耳も聞へ目も見ゆるよふになるハ七月なり故  
に七月はなるとかさなる月なり日七七日で調ひ月七七月で  
調ふ月なり七月子は随分生立ものなり又七月の後は腹の子  
がふとりて大きくなるをかりありたどひ十月で生れても十  
月を過て産れると雖とも七月の外は肉付をかりあり又うま

れ出て七日目を七夜といふ、名をつけて祝ふものあり、此の名  
を附る因縁を、七日くで調ひたる人の形ち故に、其七日のな  
を取て、人よ名と云事を附るものあり、其七日の理は木火土金  
水と、天地是を以て七つの理をつめてあるものなり、故に人の  
生れ出での事は、七夜七夜と云て、七日くよ其子も智恵付又  
親の體も七日くで調ひ七日を九つすれを七九六十三日と  
なりて何を食しても構はず、又其子も六十三日立を、智恵も付  
て來るものあり、又年中の始の御節句も正月七日あり、是は須  
佐之男大御神の御誕生日なり、又七月七日は伊邪那岐伊邪那  
美大御神の御星を祭る日なり、此日は海と井戸を祭る日なり、  
又年の内よも二百十日と云は、米の稔る日あり、又七日前は前  
七日、又七日後はうしろ七日といふなり、又神様の御さいでん  
も、七日くを以て御蔭も立あり、又藥なごも一廻り二廻り

云て、元々吞はじめたる日より、七日くよ其効あるものなり。  
又死しても七日くを吊ひするあり、故に七日を七つして七  
七四十九日すれを、ほのをの魂が落着所よ落着ものなり、故に  
人は七日くで、理をつめて出來たる形ち故に、生れ出ても一  
代、七日くで日を送りて行ものなり、又死しても七日くで、  
玉の緒の位が付ものなり、此七つの理は月より御出に成るく  
ものあり、なくと云はかさなる理なり、此かさなる理は、月と地  
とかさなりて居るものなり、夫故月のみち欠を抱合なり、故に  
かさある元は月と地球あり、故になると云事は、七つの理より  
出來るものあり、成は目出度ものあり、五穀も實かなる、又菓物  
もなる、何にても種子の出來るは残らず實かなるあり、菓物は  
中に種子があるなり、柿などにて、たねを七日の月、又人の形  
ちにも、眉毛を三日月か七日の月、目の明きたる所も七日の月な

り。又下の唇も七日の月。爪も元も七日の月が具はりてあるなり。是皆月が御造り下されたる事を御現し成されてある事あり。故に月の七日と云ふ。七日の月が産出す元あり。姿を現したるものえ。残らず七日の月より御現し成るものあり。なと云ふおんえ。月のおんなり。月を幽めて隠れたる御司を御取成されてあるなり。人も腹の中より居る間を。幽の御徳にて形ちを御造り下さるものあり。故に物の中よりあるものは。人の目より見ぬものなり。故よなといふ物は形ちを現して居るものに。名のなき物はなし。是皆な七つのなを取て云てあるなり。中といふ事は。なのかみといふ事よおんをつけてあるあり。形ちあるものは月の徳よて。御現し成されてあるあり。夫故木の葉にて。中の筋を取て。七日の月の形にかるなり。中には違ひたる葉もあれとも。是も神様のいはれよて現しあるなり。魚にては形

ちは。月の形よなりて居るは多くあるなり。又米の稔るも二百十日なり。米は人の寶あり。人は神様の寶あり。うの寶を七月で稔るものなり。又米え人の寶よして。金ありても米なくてえ人の命を繋ぐ事出来ず。其大切なる寶も。人の心の惡が世界よ満ち渡りて居る故よ。二百十日よえ少の間に米の稔を。雨風よ取る。よふの事あるなり。是則ち人の惡の罪より大雨か降り。大風が吹て。寶の出来るを。吹落し洗ひ流すなり。是皆人の難義え人より招くものなり。故よ人え善一つ。の心を以て世渡りをするよふよなれを。二百十日え目出度日なり。是迄は月の七日をきらひて居りたるものなれとも。此道を勤むれば。七日には御蔭を戴く日なり。是迄はよき日の位に。負て居たるものなり。又是迄人が水の御徳を知らず。水え活通の元なり。是迄も正月を祝ひて居たるえ。水を祝ひて居たるものなり。まつ。正月

の元日にえ。家の主人か朝早く起て。心をあらためて。和歌など作りて。若水を迎ひに行くものなり。是は神代より人の命を繋ぐ元は水なり。又人の生れる元も水より形を現したるもの故に。人が氣絶をしても。面に水を吹を。其氣が戻りて生るなり。又人が高山に登りて息が切るよふな時にても。息繼水を吞を。息のそづむも穩かにならなり故に水か世界の元なり生る元なり。水え片時もたゆまず。夜となく晝となく。若水になりて吹出るものなり。故に水の絶ると云事なし。水の切ると云事あり。汲出す程出るものあり。外の物にえ切ると云事あり。絶ると云ふ事あり。火にも燃切るといふ事あり。何にても切る絶るはあるものあり。是則ち水は活通一の元あり。如何ある穢き物たりとも。水にて洗ひす、ぎをして食事をし。又身に着る物も清く。又人の形ちも水ある故に。清らかに洗ひす、ぐ事出来る

なり。夫故此御道には。日に一度は水にて身をす、ぎ。御神前に向へを則ち。其身は神なり。故に水の心といふものえ。至てすかほなるものよて。水え方圓の器に隨がひ。直き心のものよて。至て弱うふなものなれども。其中に強き心ありて。蒸發するものなり。其水の精氣が空中に登りて。世界がくるく廻るなり。世界の水氣え月の氣なり。其水と火の勢で。天が下え。火の氣水の氣此二つを以て。世界もくるくまぎて居るものなり。又水を火の親なり。何となれを火を消すえ水なり。火が水を消すと云事なし。故にいきる元え水なり。其水よあら玉と云ふて心あるものなり。夫故正月をあら玉の春と云ふて。人のことをも改りて。惡しき事え口よ出さぬよふよして。目出度祝ふえ正月元日より。大晦日迄の水の若がへる。目出度さを祝ひ。又人よも水の心が。井戸より具へてあものなり。此心えあら玉の心なり。是迄



と正月は此あら玉の心を。つかひて居たるものなり。又神様は御無禮をするか。親は不孝をするか。主人は不忠をして。御機嫌を損じたる時には。其断を。是迄の悪きは御ゆるし下され。此後はあらたまりて。御勤め申といふ心なり。是が本心なり。此心が元なり。故に此度の御道を務むるものは。此あら玉の心をつかひ。いつも清らかにして心に濁りなく。其心に濁りなければ。則ち其人は神なり。又水は活物の元なり。世界に形を現して居物は。木の御徳あり。土ありても火ありても水あくては。ぬの出る事へあ。米あてにても粉を水でか。又苗代へ蒔入。又五月にハ苗を植。日々水を入れて。晝は日にか。り。夜は露を受けて。せい。く。と生立て。實のり。程々實もかたまりたれば。水を落して。日にかけて枯して刈るものあり。故に水に七分の徳あり。日に三分の徳あるものあり。何事も理につめてあるあり。又此

七つの理は尊き事あり。是は天御中主神様の御氣あり。此七つの氣は氣とも眞とも理とも云ふあり。此氣は自然なり。自然は御中主の御心なり。此心は目にも見へず。手にも取れず。是不思議の元なり。七月の尊き事は。産靈二柱様の理なり。故にな。月とかさなるあり。此産靈の神様は。月の國を御守り成されてあるなり。夫故人の上唇を。富士の形にしてあるあり。此富士の山は。元前世界が富士の山あり。其富士開ける時を。其富士のつじへ口が明て。開けたるものあり。其時現れし神様は御中主神様なり。其明たる口を。産靈二柱様と云ふ神なり。上の唇が高皇産靈神様。又前世界の富士が女なり。是則ち月なり。故に女の額には。富士の山の如くに造てあるものなり。故に女をふじんと云ふ。女の元え前世界の富士が女なり。又其中の活物が御中主神の心なり。是か活物の元なり。是え男なり。此氣え総世界活物の

元なり。故に月を総世界を産出したる元なり。是則ち総世界の  
氣なり。又日は総世界の心なり。地球は総世界の躰なり。故に月  
より出たる日なり。人にたとへても。魂ありての形ちなり。又世  
界の玉を海に龍宮の神様が。満子の玉を御持ち成されて潮の  
満子をさせて居らるゝなり。海の潮は世界の血なり。是則ち世  
界の血の運動は潮の満子なり。故に総世界の御寶を月か劍な  
り。日が御鏡なり。玉は海の満子の玉なり。是て総世界の御玉に  
なり。又人のみ玉を月より給えり。魂がさきみ玉と云ふ。是が  
劍なり。又胸の心が鏡なり。是は日あり。又頭のつじに腦すいと  
云ふ。子供の時には隔りこといふ。此玉を血をくり出す玉にて。  
是を人生れて三十三日の夜に。月の神様が御授け下されし玉  
あり。故に玉といふ。此玉のうきはる所あり。夫故人のみ寶も  
世界の通りあり。又我國でえ世界のうんある國故に劍鏡玉此

三つが世界の性根あり。夫故神國といふ。元つ國あり。其元國よ  
り。惟神の大道を開くは。理の當然なり。我國の大君様を世界の  
心柱あり。又神様ては月様が心柱なり。燈火を譬ふれを。燈心が  
月の神様なり。油を水あり。故に水油と云ふ。其燈心は水油が付  
て。其先に火が燈るものあり。世界を譬ふれを。月と水とがある  
故に。日の光りあるなり。人も魂が燈心。心が水。故に目が見ゆる  
なり。世界は大きき活物。人は小さき活物にして。人の形ちも。世界  
の態が移してあるなり。人も幽現あり。魂と心と頭の玉とが  
幽なり。我玉の緒も心も如何よふの物やら。そのよふの色やら。  
是を知るもの世界よあり。此魂を元へ。御引取成れたれを。形ち  
は地へ埋て。土になりて。千日すれを。海に落ち込むものなり。又腦  
髓の玉は。船と云ふあり。又心は形ちと同一やうに。海へ落ち込  
むものなり。魂を幽なり。幽は神なり。又形を現あり。此現の教又

現事の罪の御罰くえ。大君様より成されてあれども。是迄は神  
様よりの教を更になし。夫故人の魂より罪を造る事大きなり。  
故に人の身は憂る事多く。何となれを人にしれぬ幽冥の罪に  
罹りて苦む事ある故。此度を月様より人に心の教を下され  
て家屋敷の相を委しく御告下さる故。幽現の教となりて。大  
になり。是陰陽和合の事第一なり。人も陰徳より生れ出るなり。  
此陰徳は月か宿りて。月が足りて生れ。腹の内が陰なり其陰徳  
一十萬倍の御徳なり。故に七月の間に。五尺の衣類を着るよ  
ふになりて生るあり。又生れ出て十五歳まで。二丈八尺を着  
るあり。是は陽徳なり。人をつくるを夜につくるものあり。又草  
木五穀も種子を蒔て。土をかけて其種子を隠し。其隠れたる種  
子が陰の御徳あり。又其種子より芽を出すか陽なり。兎角目よ  
見ゆるか陽徳あり。さすれを陰より陽を出すものなり。陰は元

の種子あり。五穀草木にても根か元あり。如何なる大木と雖も  
も根を切を枯るものなり。枝を切りても枯る事はなきものな  
り。夫故根本と云ふ。又五穀よても右の理なり。根を切れえかれ  
るものなり。其根は如何なる大木と雖も。元え小き種子より  
大木よなるもの故。此種子え則ち陰なり。陰を月の御徳なり。  
又種子を蒔て其種子より芽を出す。前世界の開けるさま移  
りてあるものなり。何となれを其種子水よてふどり。上皮を切  
て出る時の芽は。矛の形ち。其矛の形ちへ葉の出るの二葉出  
なり。此葉は丸き葉よて。何ぞ知れず。又二葉出る。彌何の木と  
云ふ事わかるものなり。是則ち前世界のさまなり。元の矛の形  
ちが御中主神様なり。又丸き二葉が産靈神様御二柱なり。又何  
とわかる葉が。那岐那美神様なり。何よかきらす世界開くる状  
を御具成れてあるものなり。是則ち自然の道理なり。故に月は

世界の元の種子なり。人の元も月様か種子なり。其月様を人の種子と云ふ也。月星といふて。星も月も付ものなり。月の分魂なり。故も人は晝つくるものも非ず。是迄も人を日の分魂といふてありし也。大きかる違ひあり。人の魂は星が根あり。故も星の根といふあり。又玉の緒ともいふあり。其玉の緒といふは魂も頭のぎりくより。元の星の根まで緒を引て居るものあり。夫れ故玉の緒といふ。人は天よりは地たるものあり。故も人は天地の柱なり。天も玉の緒の元あり。地にも形ちの元あり。形ち地より出来たるものなり。故も天地は離られぬものなり。たとへ死しても玉の緒を御引取成るれを。玉の緒は、天に歸る形は地も歸るものあり。又千日すれを肉は解て海へ落込むあり。骨は土よなるものあり。皆夫々も元へく歸るものなり。其元へ歸れを則ち神あり。元の天地へ歸りたる故に。如何ある目下のも

の死しても。目上のものが手を合せて拜むなり。形ちある間は。目上目下の分ちあれども。幽冥では其差別なく。形ち無きを神あり。此形ち無きを神といふは。只氣をかりなり。此氣は總世界の一つの氣なり。故に形を持つて居ても。魂は神にて天より降し給はりし故に。我心て思ひたる善悪は。悉く天へ届きて。電信の如く。故に心の罪は一々神様へ。其時々届きて居るものなり。故に隠すに隠されぬ心。悪なり。恐るべきは幽冥の罪なり。人は形ちをつくりて。十人並も成れを。金欲色欲身も着る欲食の欲。此四つの欲に罹りて。罪をつくる是が則ち今日の厄なり。人へ陰徳よて現えれ。陰徳も七つの理より御産付になりて。日よかより四つの欲にて罪をつくり。其罪三分なり。其三分て身を失ふなり。故も分に取れると云ふてある也。三分も形ちを取れるなり。故も七分て形ちを産靈ひ。三分て形ちを失ふ也七

分三分と十分よなりて身を亡すものなり。水は産出す道具日  
を枯す道具なり。水は陰あり。日を陽あり。年の内よも春え花と  
云ふ。水も若やきて木の芽も立。夫に付ての花なり。其花は月の  
氣より開くものあり。故よ月と花とは昔よりいはれあるも  
のなり。故よ花は陰なり。人の心を陽氣になりて。心を養ひて壽  
命を延して與るものあり。是則ち月の御徳なり。花の開く時は  
卯の刻なり。此卯の刻は物を産出す刻限なり。則ち是は月の神  
様の刻限なり。此時萬物もふどり。五穀も實が登るものなり。此  
稔と云ふは。水より稔る物故よ。米へ日が暮ると稻の元より水  
が上に登るものあり。故よ米へ水で登る物なり。其米へ人の寶  
なり。人も一滴の露にて現えられたるもの又人の命を繫く物故  
よ。米へ水にて實を結び出すものなり。又人の身を水を以て洗  
む。其水の精氣が毛穴よりえいる故に。身潔きのとへ温なり

是體の丈夫を増すものなり。元伊邪那岐の神様も。筑紫の日向  
の小戸よて。身潔きを成されて。其時に日月を御司り成さる、  
神様が。御現れ成されたるあり。又伊邪那美神様も。備中の宇土  
の阿波岐原にて。七福人を御産み成されし事なり。故よ水は徳  
の元なり。人も身潔きをすれむ。其身に徳を積み。又身も大丈夫  
になりて。活通の元を務るあり。又神様を湯を御嫌ひ成さる  
、あり何となれを湯は火にかけて水の精氣を失ひて居る故  
よ。寒さの時に湯よ入て其時には温なると雖も少し間を過  
れを寒くかりて必ず風を引事あるなり。なにとかれを湯に入  
え毛穴が明て。皮と肉とのねそりが出るなり。其ねそりが人の  
力あり。其力のねそりを出す故よ。體によえりを付寒く成もの  
なり。故よ湯えぬるくして入を弱り少し。又ねそりは月の精氣  
なり。其精氣を受ると水より受るものあり。世界を天が下と云

ふも。月の下といふ事なり。あめは月よりめぐむものあり。又人の世渡りといふも渡を水なり。又身に浮き沈みあるといふも。其浮き沈は水の中あり。是皆水を天が下に満渡りて居るものなり。故に雨も満るも渡るも皆水なり。世界に氣の満るは水氣なり。夫故世界の氣といふを。世界中満ち渡ると云てあるなり。其氣は徳のなきものには見ねど。少し徳が身に付たれを。させるの吸口の如くなる物空中に満て居るが見ゆるあり。是則ち精氣といふものなり。其精氣を吸て人も活て居るものあり。又鳥獸も世界の活物を残らず活て居るものなり。世界を活すも此精氣あり。此精氣を水の氣あり。夫故人も食事を成さるとも。神様の御心よ叶ふよふの心を以て山こもりなごすれを。命は長く保つものなり。又人病氣よ成て廿日や三十日位を水をかでも随分命を繋ぐものなり。水より外の物では命をつなぐ事出

來ず。五穀が咽を越されを。水より外に命をつなぐ事出來ず。是皆水は月の氣あり。月を世界の心なり。國にも大君様が國の心なり。世界には月の水氣が満ち渡りて。總世界を活す。國よは大君の心が満渡りて居る故に。民安らかに。家には主人の心が満ち渡る故に。家が穩かに治るあり。若し主人の心が慢心にて。心を上よ登するか。又主人の心を亂す時を。必ず家の内のもの、心も亂て。家も亂る、なり。又人も心を上登して亂心よなれを。身を損する事あるものなり。兎角本心は。形の中にあるが本心の納る所なり。故に人か狂へを。世界にても。國よても。家にても。形よても。必ずめげる基なり。故に心と云ふものを大切なるものあり。何にても世界の狀が移してあるものなり。花杯にても。心と云ふものは。花か散たれを。其心よ實が登るものなり。其實の登るが匂ひといふあり。其匂が幽冥なり。何となれを匂

ひと云ふものは善きと惡しきとの香を匂ひといふ。其匂ひを神としてあるものなり。何となれを匂ひえ。手よも取れず目よも見へず。無一と思へをあり。あると思へをなく。是何よても幽現え具へてあるものなり。此匂ひか心あり。是れ月の氣なり。何にても其物の匂ひか無くなれを。氣か抜たと云ふなり。匂ひか氣あり。氣か神あり。活物の元なり。何にても匂ひのあるものなり。米は米の匂。麥は麥の匂ひ。又木なごも夫々匂ひあり。又人にて人も人の匂。何にても形ちあるものよ匂ひなき物なく。木も枯るれを其木の匂ひは無なるものあり。外の活物も其物の匂ひ無くなれを。惡き匂ひにかる。是を腐ると云ふ。人も玉の緒を御引取よなれを。形ちは臭く成て。人の匂ひえ無きものあり。故よ此匂ひといふは活物あり。此活物か神様なり。故に匂ひか元あり。其元は目にも見へず。手よも取られざるものなり。是か月の

氣あり。形ちか日なり。匂ひが月あり。是幽現なり。天地の陰陽月日の陰陽。其陰陽の中に現えれたる物は残らず。其陰陽か具はりてあるものなり。元の性根と云が匂ひなり。其匂ひえ元の種子あり。是か月なり。又其種子を蒔き付る地あり。形ちを現はして居ものは残らず。種子え月より現はし。形ちえ地より現はし。是月と地との抱き合よて。形ちを現えすなり。月は玉の緒を授け。其玉の緒は人の種子なり。勇あり。形ちえ徳なり。徳と云ふものは。地より現はるものへ悉く徳なり。其徳を以て現はれたる人なれども。其身持惡しけれを。徳を失ひて世界の爲をもせず。身の一代を亡ぼすものあり。是れ人にありても人の行ひにはあらず。人え我爲よ生れ出たるものよあらず。世界の爲人の爲をすは。人の道なり。是則ち大君様への忠あり。故よ此度月の神様の御教へは。人の人たる道よて。天津神國津神様を

祈り奉るも。身に徳を積。玉の緒は位を付て。下されまゝして。其身を神にして。世界を御造り直しの御手傳を。御させ下さるものなり。故に月の親神様を祈り奉る程我魂は位付て。天地の理を能く悟りて。人の爲國の爲をするよふに成ものなり。故に人と氣と心の持よふで。神に成ふと思へを神に成なり。兎角一心の立よふで。如何よふにも成ものあり。長命するも。短命なるも。富貴も成も。貧賤も成るも。皆我一心の立よふなり。其一心を明にするは。忠の道あり。此一身を忠に固て。神様を祈る時に。神君の心は叶ふ事故。我國の人は忠の心を固むれを。我國は世界の心にて。世界一等の人がらあり。故に能く心得て一身の尊きを知り。一心を改めて一身を岩の如くに固むるが第一なり。是が善きと思ひて。其善きを産出して。安心をする迄よえ。如何程か苦勞あるものなり。其苦勞を幾度ありても。劍の中も火

の中も。構はずと撓ます劣らず辛抱して。其辛抱の心を元々思ひ付たる時も。今も昔も。心を違へぬが心の固めなり。さすれを龍の玉でも違ふ事無く取るものあり。此心が出精さす心なり。一度善き事を思ひ付たれを。途中で心を倒せを。折角思ひ付たる事にて。色々と心を使ひ身も使ひたる事を。むだよして仕舞へを。惜しき事あり。是辛抱の足らざる故なり。此道も時が移りたどはいふその。我明治四年より神様君様のありがたき事を聞て。是社人の道なるべしと思ひて。一心に道を勵みて。其行をして三ヶ年は手厚く相勤め候得共。何を云ふても家持の事故。思ふよふには勤まり申さず。なれども我心を少しも亂さず。大君安全民安らかを祈り候處。明治廿一年より。神様の御懸りありて。色々の御告を下され。世界を御造り直しを。て下されます御法を御告にあり。又是迄え人が惡をつかひて



罪をつくり。其罪世界に及ぼして。世界よ色々の天變あり。又人も定めなき身の上あり。今日ありて明日なき命。又一寸先を暗がりにて。安心の出来ぬ世の中。金かありても。其金で安心も出来ず。金が無くては猶安心が出来ず。又子ありて安心出来ず。子無きものも安心出来ず。誠よ少しも安心の事なし。又難義なるものは寒中よ裸て居るものもあり。又渴死ぬものもあり。かえいゝの我子を捨てるものもあり。誠よ世の中よ子程可愛きものを無きよ。其子を捨てる親の心の苦しきは金無き故よ食事出来ず。渴ゆる故よ。渴死かすよりと思ひてする事あり。又老人よなり病よつきて養ひても無くて。渴死するものも夥たあるなり。其人の難義を聞て我心忍び難く。故よ神様へ御願よえ。大君様の御榮ど。世界の民が安らかに身過をく心も安心致すよふよと。御願ひ申居るなり。誠よ是迄え奢るものえ。身分に過たる事

を十分よして。又色々の道具を求めて足る事を知らず。是世界の蟲なり。何となれを一人奢をすれた。又其連よなるものも夫を手本として奢をする。是則ち國を亂すの手本あり。故よ奢りもの久しからずといふことあるあり。此奢りをするえ。我一人樂む丈あり。其奢りの爲に天罰を蒙りて。色々の病を生し。或は色々の難に逢て。身代を無する事あるなり。折角祖先親の長く。辛抱をして溜たる身代を無くする事あり。其元え親々より忠孝の道の教へ無き故あり。君を思ひ國を思ひたれを。我身我家よ少しも奢る事え出来ず。何となれを人の難義を見て。我身に金を入る事え出来ずものよ非ず。世界兄弟の苦勞を少しにても。救ふが人情あり。我身の上は精々金の入ぬよふよ。身を詰て人に恵むが人情あり。故よ一日も早く。人の安心を神様へ御願ひ申が誠の人あり。民の安心え君様の御安心なり。故よ此度

我身は神様より御教は。君の御榮へ民安らかを祈り。君様を思ひ國を思ひ民を思ふの御道にて。あけくれ此事を祈りて。是より人の罪を御滅し下さる、なり。又罪を御滅し下されても。跡より罪をつくる故。罪を造らぬよなる心の持よふの御法を御立て下され。此心の持よふえ。是迄は人が善と惡と此二つの心を以て。人より交りて居たるものなれを。此大全の心の御法を去りて。善一つを以て。随分人より交りの出來る御法を立て下され。又其人の惡の心の出る元は。屋敷の善惡又家の内間造り。木道具の使ひ方。何か家の事が。天理より背きたる事色々有る故。する事が左に廻り。色々の病ひを煩ひ。又色々の難あり。又かたこの出來るも。癩病の出來るも。又盜をするも。人を惡むも。人を助くるも。色々の心の出るも。皆天理より背きたる事が。故あり。夫故此度。神様が彌天理より懸けて。惡しき

處を防ぎを成し下されて。人の心も能なり。又家の煩ひ心の煩ひの無きよふ。彌病の根を御切り下さる御法立て。目出度事え限りなき事なり。恐入たる事なり。此御道の御法は七ヶ條を守り。又身の修行をし。又心の修行をして。大君の御榮へ民安らかを祈りて。心清く身も清くして。七月御信心をすれを。手の内へ七日の月様の形ち浮く。さすれを御まじなひの御傳を御譲り下されて。諸人の病を直す事あり。此始めの七月。身の垢を取る修行あり。又次の七月は天の御修行。又三度目の七月の御修行。地の御修行なり。又四度ぶりの御修行は。月の神様の御修行あり。是て彌生神となる事あり。此御道を勤て。神よ成もの。世界の柱なり。是則ち大全の神あり。天地あらん限りの生神なり。故に此道を勤むれを。我物といふ事を。何一つも無として。我身代は大君様の物と思ひ。形ちも君と親との物。心は神様の

物。我どいふものえ更ふ無し。只大君様を御主人として。ある物  
え君様より御預り申て居ものとして。我爲には猥りに金を遣  
ふ事ならぬと思ひて。日々大君様の御用人と思へむ。吝と  
て人のかずりを取事も出来ず。又公事訴訟をせず。何は限らず。  
御上の御手数数をかけぬよふ。人の妨げをせぬが第一あり。彌  
我物なしと心を定むれむ。其家よも身よも罪無くして。心安ら  
かよ治り。身も治り。家も治る。兎角心を廣く持が第一あり。心廣  
けれを世界の爲をするなり。心細けれを人の妨をする事多し。  
兎角人は人の爲よ天より御産付よなりて居故よ。神様の御心  
よ叶ふよふよ。誠を持って世の爲をすれむ。其身え神様が如何よ  
ふよなりとも。御心を添て下さるものなり。又誠を勤むると雖  
も。心細けれを神様より戴きたる。氣と心とを痛めてえ其罪重  
き罪なり。故よ形ちを痛め終ふ。身を亡すことあるものなり。何

れを人の心も氣も。神様の御分魂なり。故よ神様を痛るよふの  
ものなり。故よ幽冥の罪輕からず。我心といふ事は無きものな  
り。氣と心は借物なり。故よ其氣と心を痛むれむ。神様より氣も  
心も御引取に相成り。元へ御歸し申事出来るなり。故よ必ず  
心を廣く持が肝要なり。たとへ親よ孝を。君よ忠を盡し。人の  
爲をしても。氣を痛むれむ。親神様を打た、きして痛めるよふ  
のもの故よ。其身を亡す事あるなり。故よ氣を痛めて病よ成た  
るものえ。又其分魂を御慰申せは。自然よ其病直るなり。何とな  
れを分魂を御勇め申す故なり。是則ち神様を勇めて。罪を拂ひ  
て御貰ひ申事なり。必ずいつも心は御勇め申が肝要なり。  
其心と氣を痛めぬよふよして。神様へ御すがり申て。何事も神  
様よ御任せ申せむ。其身の苦勞は無きものなり。神様よ便らず。  
人の心て行ふ事を一寸先え暗がりなり。故よ如何程人の心を

苦めても。人の心の儘よ成らぬ故。神様よ御任し申しても申さずても。御任し申さねはならぬ。自然の道理なり。故よ心を安らがに持が第一なり。其事能く考へ見るに。下人にて盗人。又博奕打。又色々亂暴をするもの。心を痛めぬ故。病なきものなり。是心を痛めぬ印なり。なれども現事の罪に罹りて。名をも身をも失ふ事あるなり。此下人は人を殺しても。我身の垣を榮耀を遊びて姫買をし。只家を持事も思はず。親も兄弟も思えず。只其身をかりが可愛事を思ひて。身を亡ぼすものなり。故に何にてを思ひ過れを亡ぶるなり。家を思ひ過れを家を亡ぼすあり。何となれを身を思ひ家を思ふものは。人の害をする事あるなり。故に心細けれを必ず天の罪あるなり。心大きなれを人の爲世界の爲をする事あるあり。故に天の助けあるものあり。是迄え一身一家の事を思ふと。十人並の人といふて居た

るものなれども。此ものは決して十人並のものに非ず。何となれを天より人を御産付に於る神様の御心と。決して我爲に御産付成さるもの。非ず。第一大君の爲親の爲世界の爲相互人。人の爲よ。御あらはし成されてあるもの故。神様の御産付下されし。御心の儘よして一代を過るころ誠の人なり。此人神様が幽冥より御心を添下されまして。一代を御過させ下され候事故。必ず我爲をかり思ひて。人の妨をするものに非ざるなり。是迄え色々道をあれども。彌の道が人の道やら更に分らず。故よ人も心を一よ固める事出来ず。一代狼狽て。あの道この道と心を狂はして居るなり。何となれを人え幽現るなはりて居るものなり。其もの。幽冥よりの御教なき故。彌天理に違えざる道なし。一代是が人の道といふ事を知らずとたつものなり。又今日我よ何様が玉の緒を御授け下されたやら。又

形ちも何様が御造り下されたやら。又生れて成人するも。又草木を以て雨露に打れぬよふ家を作らぬも。又暑さ寒さを凌ぐよふ身に纏ふものも。元々何様が御造り下されたやら知らず。五穀にて命をつなぐも。皆是月の神様の七つの理より御造り下されて。生き榮て居ものなり。腹の中は體を造り出す間は一世界。又生れて死する迄が一世界。又死して一世界。三世の世は残らず。月様の御守護なり。死しても玉の緒は元の星へ御引取成る。ものなり。故に元の親様を知らずして。誠に暗がりの世の中なり。是迄は元々産付下されし我の親を知らず。故に蓄類同様の界なり。故に是迄は死して行さきも知らず。夫故色々事をいふて。地獄へ行極樂へ行といひ。我魂の行先も分らずして。只うかくとした事なり。故に此御道で能理を御教に成て。人心の我をせぬが第一なり。如何程我欲我無心を以て身代

を拵へても。其金を先の世へ持て行事え出来ず。只子供に花を持せたよふのものなり。跡のもの、心得で。如何程金を持って居ても。少の間に無くするものなり。是則ち我事斗り思ひて。家を富したるも。必ず身代を早く無くするものなり。如何程盡ぬよふよと。堅くしてありても。夫は役に立ち申さず。身代の盡ぬ防ぎは出来ぬものなり。是を世界の融通のもの故に。廻り持のものなり。なれども心を廣く持て。人の爲を以て君に忠の心を持って。道に欠ぬよふよして出来たる身代也。長く持ものなり。故に一代を過すに。我身我家斗り思ひて一代を過すものは。大きな損なり。何となれを人の妨をする事ある故に。天の罰を受けるものなり。故に人と生れては人の爲をして。君に忠の心を持つが人の道なり。同じ人と生れて。世に功をすること。人の人たる道なり。昔より身代を拵へて。出精をするものも。澤山あれども。是

は持結もちむすよならぬ故ゆゑに物ものが無なくなれを。其そのもの、徳とくも無なくなるものなり。只其身代みみしろのある間ま丈だけの徳とくなり。忠ちゅうを盡つくして世界の爲ためをいたるもの。未代みよひ迄までも其徳そのとく世界よに満みて人の手本てほんと成なるなり。此事このこと能よく考かんがへて此道このみちを勤こめて。大君おほきみ様さまに忠ちゅうを盡つくして。世界よあらん限かぎりの忠義ちゅうぎの花はなを咲さかするが第一だいいちなり。忠義ちゅうぎより外ほかに道みちは無なきものなり。天あまの心こころに叶かなふなり。此道このみちを迷まよはぬよふに明あきなる御道ごみちなり。佛法ぶつぽうには十萬億じゅうばんいっ土どへ行いくと云いて居ゐたるものなれども。決きして外ほかに世界よを無なきものなり。天地あめつちの間まの外ほかに世界よを無なきものなり。外ほかに世界よありと思おもへを大なる違ちがひなり。近ちか比ひを天あまの星ほしを世界よと云いふて居ゐるものありといふ事ことおれども。是こゝろを違ちがひあり星ほしは人の根ねあり。故ゆゑに此地球このちきゅうでは人が星ほしをみたよふものあり。何なにとあれを人ひとにも世界よの状まゝあるものあり。故ゆゑに世界よを無なきある活物かつぶつ。人ひとは小こさき活物かつぶつあり。故ゆゑに人の元もとたる星ほしは根ね

あり。世界の状まゝを移うつりあるは。理ことわりの當然たうぜんなり。何なにに限かぎらず天地あめつちの状まゝか移うつりて居ゐるものなり。草木くさくなどよも世界の状まゝが移うつりて居ゐるものなり。又人の家いへも一世界ひとよなり。又何またなにの種子たねこを蒔まけても芽こゝろを出いす時ときよえ。天地あめつちの開ひらく状まゝをかたどりて出いるものなり。是こゝろは皆みな世界よは御中ごちゆう主ぬし神かみ様の御心ごこころが。世界よに満み渡わたりてある故ゆゑに。世界よは活い通となり。又人の玉たまの緒いとに千年せんねんを生なるものなり。夫おの故ゆゑに。此度このたび時とき至いたりて。人の活い通との御道ごみちを御授ごまけ給たまはる。人の憂うれひを滅くするの御法ごぽうなり。人ひとに憂うれひありては。逆さかも活い通とをすする事こと出い来きず。故ゆゑに人の心の安心あんしんをさせ大全世界だいぜんせかいとなさるは。此御道このごみちを務つとめて。人を神かみよし。元の神世このかみよに改あらためて。幽現ゆうげん一致いっしに御造ごぞうり替か成なされて。何事なにことも物ものに定さだめを付つけて下くだされ候まち事ことなり。先まづに神かみ様さまを月の神つきのかみ様さまを心こころとし。又世界よでは我われ大君おほきみ様さまを心こころとして。民たみを殘のこらず兄弟あに

として。大君様の御召使よ成て。心を安く持て。世界よ貧福無く  
同じよふよ安樂よ慕して。只今日々々の仕事を遊ぶもの  
なく。世界一體のものが。寒き目もせず。渴るものなく。又奢に長  
ずるものもなく。雜義人のなきころ。彌大全の世なり。故よ人の  
心も一に成て。身の事も家の事も思ふ事なし。明慕思ふは君に  
忠義と國を思ふの一筋なり。故よ物の定めを付れた。人に惡く  
く云はれる事もなし。又人を惡く云ふ事もなし。氣兼苦勞を  
する事もなし。是世界のもの、心を一に固る故に。罪を造る事  
なし。故に世界に天變なし。人の煩ひもなし。是則ち大全なり。故  
に人が神に成て何事も心の儘になるあり。昔の神世の通り  
あり。又月様を祈る天理あり。天理を御中主神様あり。是七つ  
の理の元あり。活物の元あり。又産靈二柱様と月の國を御搦ひ  
成されてあり。此神様と玉の緒を御授になる神様あり。又

須佐之男神様は人の罪を御罰し成される御役前なり。月より  
御産付成されし人故よ。親神様が人の善惡を御分け下さる御  
役前なり。是え外の神様の自由よ成らさるものなり。何となれ  
は人よても。産付たる親で無くて。子の仕付をする物よ非ず。  
人の子が惡しき事をすれ。其産付たる親へ云ふて。親よて善  
惡を分けて叱るなり。産付たる親の骨折は。何から何迄子よ懸  
りて苦勞をする事。口よて盡し難く。則ち月の神様にても。世界  
の人の御仕付を成さる、事え。神様の御心の痛む事なり。是迄  
え産付られたる親神様を知らず。故よ元の親神様が世界のも  
の、可愛さよ。色々御骨折を下されて。人の惡を拂ひて。大全へ  
御導き御生立下さる故よ。外へ心を狂はせぬよふよ。早く大全  
よ趣くが肝要の事なり。是心の仕替の道なり。其心を御主人な  
り形ちは家來なり。一心が思ひたれ。形え付て行物なり。形ち

は先へ行ふもの、非ず。皆氣と心の思ひ付たるよふよするは形  
ちなり。又日の大神様を伊邪那岐神様が御後見を成されてあ  
るなり。又久々、奴津神様が地へ植付る種子の芽を出して下さ  
る神様なり。大神宮様と世界の人の目を御司をり成さる御役  
前なり。又地球ては大君様御皇后様の御後見は伊邪那美神様  
なり。此地を伊邪那美神様が地も山も海も御構ひなり。此神様  
が人の元々の神様あり。故に此神様か総世界の御先祖なり。皆  
此神様より血統傳えりたるものなり。故に我大君様は神様の  
御血統絶す。夫故天地の神様の御相續人なり。故に外に類ひな  
き神國の御司を御取り成さる、を我君様なり。夫故元つ國よ  
り天が下へいりてりかがやくを忠義の道なり。是則ち月の御道  
なり。是大全あり。我國は狭き國あれとも。諸民心を一よして忠  
に堅めて。神の御心を叶へた。神様が御心を添下さる故に。外國

が如何ある大國と雖も恐る、に足らず。神々か力を御出  
成る、時は少くも我國に疵を付る事なり。又人よも疵の付事  
なり。是迄を神様は人を思ひて晝夜御守り下されても。其神様  
の御心を知らずして。御無禮斗りして居るものなり。又大君様  
は民を思ひて明暮御心配を成されて下さる、よ。其大君様の  
御心を知らず。兎角悪き事を御戒に成りてあるを。其御政事よ  
背きて。御手敷を相懸け恐れ入りたる事なり。親は子の事を思  
ひて。明暮心配するよ。其子は親に隠々悪しき事をし。又親に艱  
難して生育られたる事。思えずして。我獨り大きよなりたる  
よふよ思ひて。心得違ひの事多くあるなり。又此御道でハ神様  
の御恩を知て信心をし。神の御心よ叶ふよふよ。又大君様へ  
え忠を盡し。又親よえ孝を盡し。夫婦睦じく兄弟と中能く。他人  
よ誠を盡し。又大君様は民を思はれ。又民を大君様よ忠を盡し。



親を子を思ひ。子は親を思ひ。我は人を思ひ。人を我を思ひ。是則ち思ひ思はるゝの大全なり。是迄を兎角上々が思ふ斗りて目下が上を思ふ事なく。故に上々が思ふ斗りて片思ひにて。兎角國も亂れ。家も亂れたるものなり。故に心の安心する事更になし。なれども此御道は思ひ思はるゝ、大道なり。是則ち人の人たる道なり。是迄を欲に懸りて。君の御政事よ背き。親の心よ背き甚だしきは親子の中も。兄弟の中親族の中にて。少の欲より欲となりて。御上様へ御手敷を懸るよふの事も。世間にて。間々あるなり。皆是欲より起るものなり。其欲の元はある物を。皆我物と思ふ故に人情を失ひて。犬猫同様の淺間敷心を持なり。寶は大君様の物と思へ。個様の我無心へ出すものに非ず。なれとも今の人へ欲をせね。世が開けぬと云ふて。人情を捨て人の物を。天下晴れて取よふのものを。知ら人と云ふ。鷺を鴉に

云ひ曲て人を泣すものを。褒るよふの世の中故に。誠を盡すものあれ。丁寧人で役よ立ぬと痴呆のよふよ云て。直打のなき事。是は大きな違ひなり。かよふな人氣よて。我もくど人の惡き事を。して。御上様へ御手敷を懸。惡を出す故に。世界に其惡が満て。色々の天變あり。又色々の病流行て。人の壽命短く成なり。又野よ作り立たる物も。少の間よ暴風に取れて仕舞ひ。又船に乗るものも。自然暴風よて難船。寶を失ひ。剩さへ命をも失ふ事あるなり。是則ち此暴風は人の心の惡より出るものなり。何となれを人の心の惡は罪なり。其罪天地の間よある故に。暴風にて其罪を吹拂ひ成されぬを世界がめげるなり。何となれを家よ罪あれを闕所よ成なり。又人に罪あるを其罪人の形ちは縛られて。自由に成ぬものなり。又甚しき罪なれを。命を失ふなり。又幽冥の罪よ罹れを病み煩らひて。形ちが自由よ

成らず。又甚しき罪あれを死するものなり。是則ち世界も人も同じ道理なり。人え世界の柱故。人の罪は世界も及ぼし。其世界の煩らひえ人の煩らひなり。是則ち世界え人の住家なり。故に是迄の惡の心を去りて。此御道を勤めて。世界の人の心が善し立戻れを。世界も煩ひなく。家に煩ひなく。身に煩ひなく。心に煩ひなく。是則ち大全え。元の神世の御法あり。是迄は神様の御教あき故。身欲身勝手をして。世界の爲君の爲を知らず。故に人の爲をして居ながら心の持よふ。少の欲より人の妨げをするあり。何とかれを百姓は五穀を作り出して。人を養ひ。又工え家を造りて。人の雨露に打れぬごとく。又人の扱ふ色々日々入用の道具を拵ゆるもの。夫々髣古をして人の不自由無きよふに。又商法人は色々世界の物を運轉させて。人の不自由のあきよふ土地に無き物を氣を付て。多分もて行てえ人の安心

を興へ。又身に纏ふ物も。まゆを作り糸を拵へて。人の身を夏冬暑さ寒さを凌ぐ事を。世界も人の爲をせぬものは無ければ。少の欲より其徳を失ひて。却て人の妨をして罪を造る事も多し。故に少の我欲我無心を止めて。人の爲と心を定めて行ふ時。兎角人の爲の善き事を思ふが。此神様の御教へなり。さすれを天の助けありて。難なきものなり。たとひ我欲をして多分金を儲ても。其金は天罰よて色々難ありて無くなるものなり。何となれを元々神様より人を御造り出し成さる。御心え。人の爲君様の爲に御産付し成るものなり。其神様の御心よ叶はさる故。我欲のものよは罰があるなり。又是迄は女え愚なるものとして。君に忠義の事も。國を思ふ事も。教へをせず。女は表し立ぬものとして。善き教をせぬ故。女の心え小きものなり。天より御玉を下さる。え。決して男女の隔なけれを。教へ

生立の悪しき故。女は愚なり。是迄の女の教と云ふは遊藝を  
教ふるが。上々の教なり。其遊藝を戀のか、りたる事が多し。智  
惠のなき子。どらの智慧付るよふのものなり。智慧を付るも  
悪しき智慧を付て心を亂す教へ斗なり。夫故自然に身を亂す  
事あるなり。是則ち教へ悪しき故なり。又子を産ても母の心が  
愚なる故。又其子も其腹の中より宿りて。母の心の事を明暮聞  
込。又産て生立るも。其母の愚なるもの、云ふ事行ふ事を見聞  
して居る故。其子も愚なり。故に女の愚なるは國の衰微とな  
るあり。故に此御道に女を能く仕込て賢女を拵へて。賢き子  
を産て國の柱を拵へて。國を富して。相互に國に盡す心を産付  
るが。此御道なり。此教へて。何も藝なくとも。随分大和魂を出  
すものあり。故に我もくんと手を引合ふて。君に忠義の心を出  
して。人の爲をする事第一あり。君の爲國の爲に如何程人をあ

やめても。其歌をあやめる程。其身に位が付て。人にも尊まれ。君  
様にも御位を御付下されます事あり。又家の爲我身の爲に誤  
りて。人をあやめたれを。其歌を取られて。其身を無くする事あ  
るなり。是則ち君と國とを思ふもの。則ち神なり。故に其身は  
神様が御守り下されて。何事も悪しきを拂ひて。善きよ御引廻  
し下さる事疑ひなし。故に此御道に神人一體の大道の御教へ  
なり。神君民の心を一にして。幽現一致の大道なり。故に暴風の  
吹事なし。荒き浪の立事なし。又年の内にも四季と云ふ事あり。  
春に花にて陰の徳。又人の心は陽の心を出して勇めるなり。是  
則ち陰と陽との心合て。慰むものなり。花に陰なり人の心は陽  
なり。世界と人と陰陽に成て。命を延すものなり。又夏は陽に  
て至て日のつよきものなり。故に人の形ちも弱くなりて。暑さ  
よ當てらる、なり。何となれを夏に邪氣強き故。形ち弱きも

のなり。日が照りたれをかちく照るといふ。又人の惡氣が火の心なり。此の火の心が焼け火振りなり。其焼け火振りの心が出れを。人をあやめるか我身を失ふ事あり。何となれを刀は人を切る物に非ず。皆人の火振りの心が人を切るものあり。故に焼火振り程恐ろしきものは無し。何となれを家の内も家内不和合なれを。かちく云ひ事をする事あり。又家が不和合てかちく云ふよふに成を。思ひく心の心を出して家を貧し成なり。又人の門に立物貰ひを非人云ふなり。火の付音え至て惡し。又秋に物の枯れる氣あるなり。是陰の氣あり。草木が枯れたよふに成れども。根に力を入れて至て木の強きものあり。故に十月の投木と云ふて。投ても付き生るものあり。又米を取込む時あり。其米を稔りの一大事のものあり。人の寶あり。其寶を取込時あり。夫故神様の御祭りを秋あり。秋に月あり陰あ

り。故に秋の月と云ふ事あるなり。又冬も陰なり。故に冬籠と云ふなり。冬は人の形ちが強く成て病み煩ひも少し。道を歩くもかけりて歩ゆむものなり。是則ち人の形ちの力を増すなり。又寒三十日の間は物を産出す。力烈しき故に。此氣前世界を造り一時の氣なり。故に水が形ちを結ふものなり。雪と成氷となりて。水の徳の甚しき時なり。故に寒に水で晒したる物を腐る事なり。又神様へ信心するものも。寒に水行をして。身に徳を積むものなり。又物の藝古とするにも。寒に藝古と云ふ。又謠ひ遊藝杯も寒に聲を使ひて。藝古をするものなり。是水の徳なり。又我國は言葉の國故に。五十の文字を皆使ふなり。外國に文字數少し。又音の出るものも。我國人は腹より出す音なり。又外國人を唇で音を出すなり。其元は外國の地え土が焼土故に腹より音が出ぬものなり。土に黏り少し。又我國の土は黏り多し。其元を根元

國故も結りあふなり。其土の粘りが強きものなり。其土の粘りが神様の御徳なり。又よき言葉も御と御とが付なり。御教みがかく人のみ玉みごとみのり。神様御乗成さるが御輿。御代御祭御徳御位の御の字はみともことども云ふみは水の音なり。ごと木火土金水此五つ目が水なり。皆みもごと水の音なり。是れ清き神様も仕る事多し。是則ち水も形を造る元なり。活物の元なり。又五つ、と云ふ事。つが二つ付あり。其つの二つ付は。月と地球の抱合故。つが二つ付なり。又をど云ふ言葉も元の音なり。其元と云ふ。玉の緒もを、引てあるが元のをなり。故も玉の緒と云ふあり。又おどこ。おあこ。と云ふ人もをより出来たるものあり。人の形ちよも臍の緒が元て。形ちを造りて與るものあり。又數もつの付は土より出来たる數あり。故も數か元あり。一月二月三月と十月迄で。世界も出来て人も出来るものあり。其

土より出来たる総世界故。月と云事は。土の木と云ふ事あり。又つくど云ふ事。物を集る氣より吸寄するあり。其吸寄る氣が月の氣あり。是氣は水の氣あり。水はずひあり。故も月は日と陰陽地と陰陽海と陰陽人と陰陽皆月に付ものあり。是迄の學問は。人か天地の理又色々の理を悟りて。出来たる書物なり。故に只目に見ゆる丈の事を悟りて居るものなり。夫故神理と云ふ事なき故。學問に達したるものでも。人の道を務めさるもの多くあり。又疵のなきものなし。暗き世の中故。此度を天地を御造り成れたる神様が。直々御告げに成て。人と御顯も成たる元の神様も。御存なき。前世界の出来たる元の元たる事。又世界開けてより。是迄の事を。天地の間の事を。知れぬものなきよふも御告げよなり。尤天文の事。今警古中よて來三月迄に。天文の事も委しく御教も成ものなり。依て天地の間の事尋

ねたき人あらを。遠慮なく尋ね成されを。委しく解て諭し申事  
なり。是迄の人の作りたる學問は。一度習ひて跡より講義をす  
るよふの。六ヶ敷事あり。神様の御告は。女子供よも咄しのよふ  
よ。讀さへすれを。天理が能分るよふの。御教を成されてあるな  
り。其人の作りたる學問を。尋るとも御教へなし。人の知り得ら  
れぬ理あらを。御尋ね成さるべし。又人の病を直す御法。家屋敷  
の天理よ叶ふ御法。人の病の蟲封じの御法。家屋敷野山よ災を  
する物の封じの御法。人の罪を作らぬよふ心直しの御法。身の  
行ひの御法。色々御告ありて。人の憂ひを御防ぎ賜えらる。誰の  
爲なるぞ。只萬民の可愛き斗りよ天地十柱之神様が。五ヶ年の  
間日夜御集ひなされ。民の安心する事を深く思召れて。日夜御  
苦勞を成さる。その時とはいふもの、恐れ入たる神様の思召  
よて。ありがたしどもかたじけなしとも。口よ申し盡し難し。又

夫よつき我形も五ヶ年の間よえ。此御神告を戴くよえ。五度も  
七度も息の絶るよふの御行よ。御かけ成されて此御法が立ち  
たる事なり。此書物を理を詰め盡して。天が下に類ひなき尊き  
御書物なる故よ。必ずく龜末に取扱ふ可からず。悉く神様の  
御告にて。人の作りたるに非れをなり。

版權登錄

明治廿五年八月廿九日 印刷

明治二十五年九月一日 出版

定價拾七錢

發行者

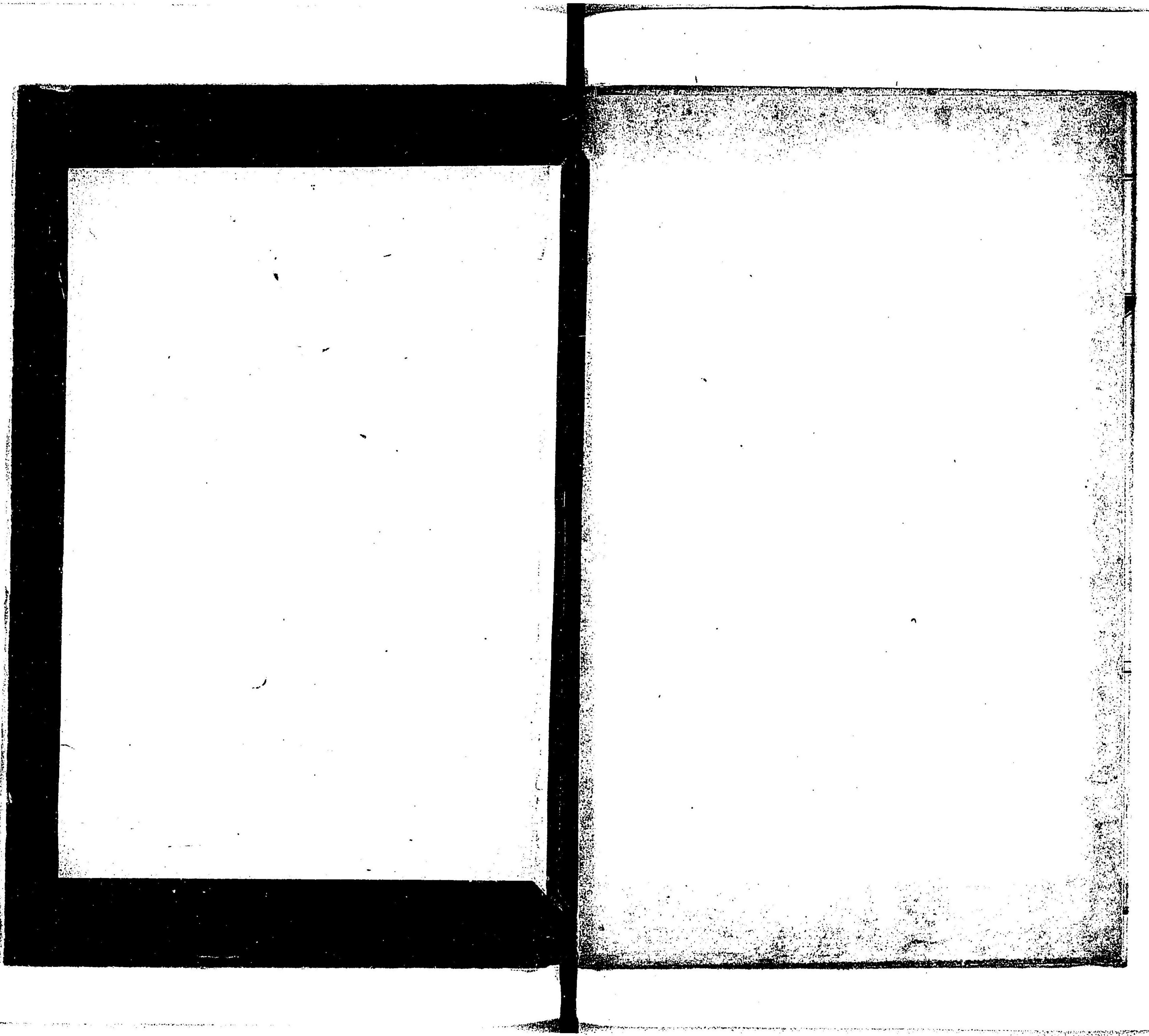
岡山縣淺口郡阿賀崎村  
三百七拾番邸

東盛とよ

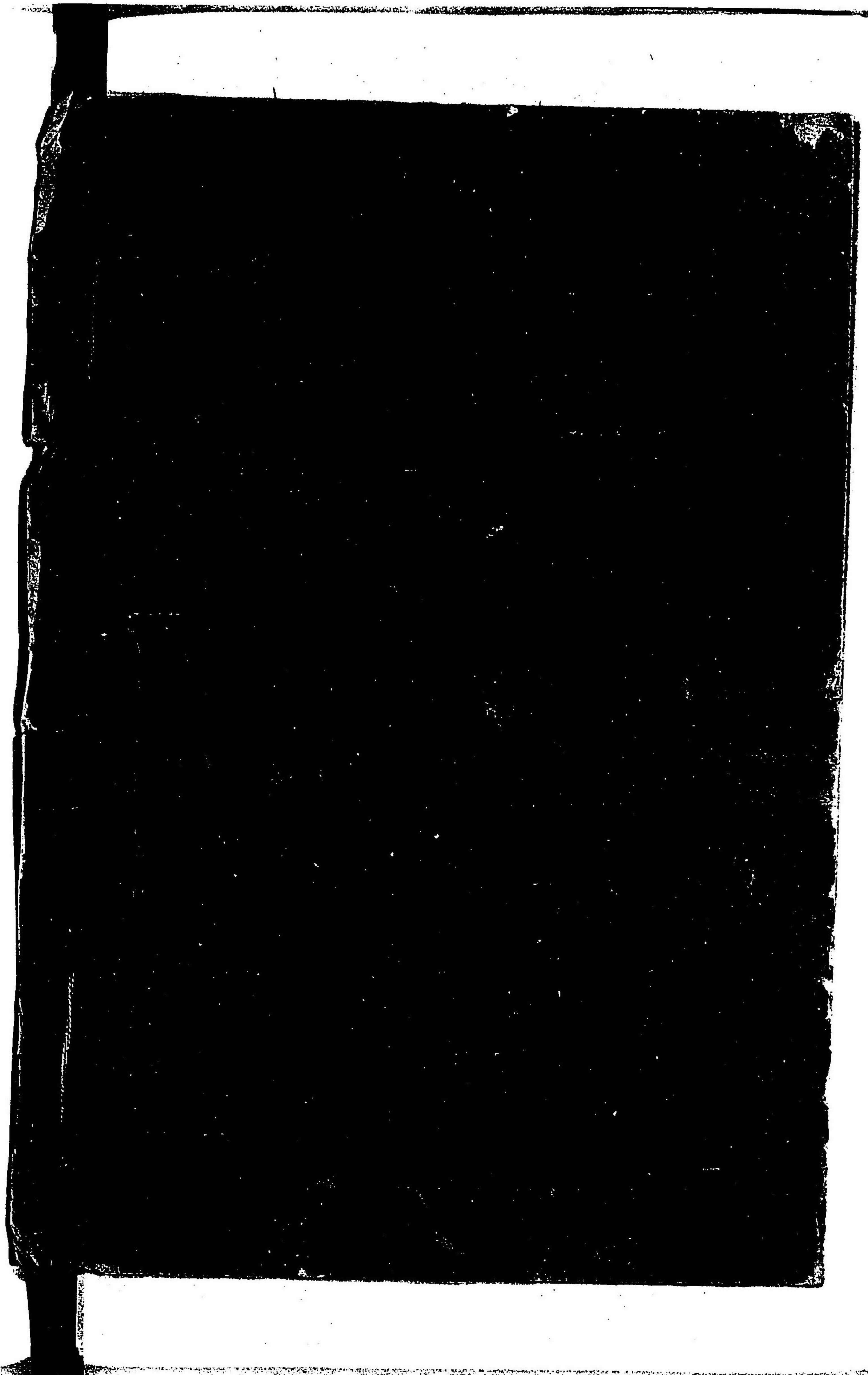
印刷者

岡山縣窪屋郡萬壽村  
大字富久二拾八番邸

松原理吉







特35

754

014222-000-3

特35-754

神勅大全 上

東盛 とよ／刊

M25

ABB-0550

